

編集後記

- 昨年度新人戦で井上翔太君が個人優勝を果たし、団体でも2位に食い込んだ。全国レベルの競技会での優勝となると、前は1939年（昭和16）、第2回全国学生グライダー選手権の覇者となった牧野伊兵衛先輩にまで遡らねばならない。実に74年ぶりのことで、快挙と言っている。これで井上君は全国からマークされる存在となり、同君を擁する同志社も注目されることになる。これに相応しい結果を残し続ける努力が求められる。決してフロック（正しくはFluke）と言わせてはならない。ともあれ、井上君の精進の結果を讃えるとともに、OB全員で慶びたい。
- 本号から印刷、製本は学内の施設（プリントステーション。学生からの卒論等の印刷が有料で可能）を利用出来ることになった。そのために多少体裁が変わった点のご寛容頂きたい。理由は単純、経費削減である。会費納入率が年々低下し、30%そこそこでは、現役支援に回す予算を何としても優先し、本誌の継続を図るためは止むを得ない措置である。作業に当たる部員にはバイト代ぐらいは出すとしても、負担を掛けることになって、OB会としては申し訳なく、また、情けない。
- 吉岡名保恵ご夫妻が永年続けておられる北海道滝川での「ユースキャンプ」活動についての経緯と現状を知りたくてご寄稿をお願いした。出身校や所属クラブなどの枠にとらわれず、“より上を目指す若者を育てたい、理屈抜きでグライダー好きが楽しく切磋琢磨出来る場を作りたい”という損得抜きで純粋な活動に敬意を表するとともに、このような活動をしているOBを持ったことを誇りに思う。
- 牧野先輩が戦争体験を伝えて下さった。私達と同じように大空に憧れた若者を戦争に駆り立て、戦う道具となったグライダーの操縦桿を握らせたかつての時代の抵抗出来ない国家権力による悲劇を考えると、二度とあってはならないことだと強く思う。特に最近の政権が立憲主義国家であることを忘れ、国民を戦争へと導いた反省から、戦後のこの国の礎である平和憲法をないがしろにして「戦争が出来る国」へと変えようと振る舞う今。
- 本年号ほど、編集内容に行き詰まったことは無かった。馬齢を重ねて、頭の回転も悪くなり、ネタ切れ状態に焦った。苦し紛れに考えた内容での原稿依頼に快く応じて下さった寄稿者に助けられて、何とか格好をつけることが出来た。只々感謝するのみ。

翔友 **XXIX** 〈非売品〉 編集 翔友会

2014年6月1日 発行 同志社大学体育会航空部

印刷 同志社大学プリントステーション
